

文語の苑

メールマガジン第十号（平成二十四年四月）

遠野物語読後感

最近柳田国男の「遠野物語」及びその続編とも言ふべき「山の人生」を読みぬ。東北の遠野地方及びその他各地の山を巡る奇異なる伝承風説を集めたる記録なり。現代においてはかかる伝聞は一笑に付さるるのみなるも古代より戦前に至るまでこれを信ずる者は甚だ多かりき。

山男、山姥、大人、天狗など呼称は種々あれど総て同種の山の住人の事ならむ。姿見えぬ場合も神隠し、天狗倒し等その所業と目せらるるものも少なからず。古くは鬼と呼ばれし者も恐らく同類なるべし。その形状は、これ等を見る者凡そ動顛したれば誇張せらるること常なり。丈高く、赤みを帯び、目は皿の如く輝き、長髪多毛にして屢裸形なり。常に害を為すとは限らず、恵みを与ふることもあり。握り飯、餅、酒を好み、これを与ふるときは、鳥獣、木の実、粗朶などの返礼も為す。昔は山里にて若き者の行方知れずとなること珍しからず。恐らくこれ等魔性の者の攫ふところなるべし。

これ等の風説は地域、時代は変はれども数限りなく、且つ、共通の要素多く、単なる創造の産物に非ずしてその基となる事実ありしことは疑ふべからず。

柳田の観察によらば古代に国津神と呼ばれし先住民族は多くは平地民に同化せられしも、一部はこれを拒否し山中に逃れ、文明以前の生活を以って環境に適応し、最近に至るまで秘境に生存を続けたり。山野を跋涉して獲物を取り、火も利用せず生にて食する生活なれば運動能力、感覚ともに常人の域を超えたり。深山幽谷は彼らの聖域なれば、昔の人はこれを怖れ木樵、獵師と雖も冒すことは容易にせず。

最近は山林の開発進み、熊や羚羊や猿も餌を求めて里へ出没する世なれば山人の生存領域も失はれ、遺憾ながら彼等既に絶滅種と相成りたることを惧る。国を覆ふ広大なる原始林も、曾つての如き恐るべき幽界に非ずして、テレビ番組の表現を用うれば「優しき」自然となり果てその神秘を失ひぬ。

余が遠野物語及び山の人生を読みて不思議に思ふことは、わが国の山の世界に修行のこと殆ど現れざる一事なり。ヒマラヤの秘境に常人を遙かに超ゆる人の、俗界を離れて住むことは同じく耳にするところなり。されど彼等は多く靈的修行者にして、永年の研鑽の末驚くべき能力を備ふるに至り下界の人々より聖者として崇められる。わが国の秘境もまた修行に適したる処多かるべきに、少なくとも柳田の著作にはかかる記述なし。平田篤胤の幽界異聞には多少それを匂はする記述あるもヒマラヤには比較すべくもなし。

文語の苑

メールマガジン第十号

小倉百人一首 十 遍昭

天つ風雲のかよひ路吹きとぢよ をとめの姿しばしとどめむ

奈良時代から平安時代に掛けての宮中では、十一月の曾ての新嘗祭の日に、五節(こせち)の舞の行事があり、公卿や殿上人の家から、舞姫を出すことになってを(お)りました。十一月と言っても旧暦ですから、五節の舞の日は、年によって違ひ(い)がありますけれども、今の新暦の新年前後になります。

五節とは、宮中で行は(わ)れる正月に三回、五月と十一月の計五回の行事の総称ですが、五節の舞は一年一回、十一月だけのことでした。この行事については源氏物語の「乙女」の巻に、かなり詳しい叙述がある。そこにあるや(よ)うに、五節の舞姫を出す年に当たった家では、それを名譽のこととし、一家の中の年頃、といっても十代の美しい娘を選び、入念に準備をして、宮中に舞姫として派遣したや(よ)うです。

奈良時代には、後の孝謙・称徳天皇が内親王時代に、五節の舞を舞は(わ)れたとされてを(お)りますし、身分はずっと低いけれども、小野小町にもその言伝へ(え)があります。平安時代の五節の舞姫として、よく知られてゐ(い)るのは、若いころ在原業平と浮名を流し、後に清和天皇の女御、陽成天皇の母となった二条后、藤原高子(たかいこ)です。自分の高い名家の姫君が、人前で舞を舞ふ(う)わけですから、容色によほどの自信があつたに違ひ(い)ありません。

この百人一首の歌は、作者遍昭、若き日の名、良岑宗貞(よしみねのむねさだ)が宮仕へ(え)をしてゐ(い)た頃、五節の舞姫を見て感動し、詠んだ歌です。どれほど根拠のあることが知りませんが、遍昭が見た舞姫は、藤原高子だったとも言は(わ)れます。

遍昭は、桓武天皇の孫、優秀な若い官人として、深草帝と呼ばれた仁明天皇の側近く仕へ(え)、異例の寵愛を受けます。そのため天皇の死に会つて世をはかなみ、妻子を棄てて比叡山に赴き、そのまま出家します。ただし僧としても真摯に修行に励み、雲林院等の寺院をあづかり、後日出世して、僧正にまでなりました。

在原業平、小野小町とともに、六歌仙の一人で、人柄は軽妙洒脱、独特のユーモア感覚に富む歌を多く遺しました。小野小町のときと同じく、以下に拙き手遊びを掲げます。

往昔(そのかみ)の五節の舞を 舞ひにしは藤家の姫か

はた風に乗りにて飛び来し 羽衣の天つ乙女か

たをやかに指す手引く手に ゆくりなく心乱れて

吹く風に乙女が姿 留めよと吾は願ひき

秋の野の花をみなへし 語るなよ吾落ちにきと(*)

深草のすめらみことの 露の如みまかりたれば

雲林院(つりんいん)桜散り果て わび人は一人たたずむ

妻も子も棄てし憂き世に 苔の袖かはきだにせず

(*)名にめでて折れるばかりぞ をみなへし 吾落ちにきと人に語るな

文語の苑

メールマガジン第十号

文語歌曲「三才女」(和歌を使った歌詞)

明治の末年に「尋常小學讀本」の中の韻文教材に曲がつけられて、「尋常小學讀本唱歌」なる教科書が出版されました。その中に「三才女」と題する歌があります。平安時代の三人の才女としては、紫式部、清少納言、和泉式部があげられることもありますが、ここでは別の三女の、よく知られた和歌を組込んだ歌詞になっています。因みに明治時代には、歌人の與謝野晶子、山川登美子、茅野雅子が明星の三才女と稱されてゐます。「尋常小學讀本唱歌」は、作詞委員會、作曲委員會が編成され合意の上で歌が作られ、著作権は文部省が持つてゐたので、作詞作曲共、名前は不詳となつてゐます。この曲の作詞は芳賀矢一とよく書かれてゐますが、實際は「兔と龜」「金太郎」「花咲爺」を書いた石原和三郎の作品のやうです。

一、色香も深き紅梅の 枝にむすびて、

勅なればいともかしこし、鶯の問はば如何にと、雲のまで
聞え上げたる言の葉は、幾代の春かかをるらん。(紀内侍・紀貫之の娘)

御所の梅が枯れたので、紀内侍の家にあつた梅が天皇の命で移しかへられた時に、その枝に結ばれてゐたのがこの歌。そのお蔭で梅は元に戻された

二、みすのうちより、宮人の 袖引止めて、

大江山いく野の道の遠ければ、文見ずといひし 言の葉は、
天の橋立末かけて、後の世永く朽ちざらん。(小式部内侍・和泉式部の娘)

宮中の歌合に呼ばれた小式部内侍に、丹後にゐる母の和泉式部からの歌指導の文はまだ來てゐませんかと擲はれたのに對して、斷乎として來てはゐないと答へた歌

三、きさいの宮の仰言、御聲のもとに、

古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬと、
つかまつりし言の葉の 花は千歳も散らざらん。(伊勢大輔)

奈良から八重櫻が献上された折、これで歌をと命ぜられて、八重に對して一段上の九重である皇居に匂つて(まばゆく咲いて)ゐる、と即座に詠んだ

和歌をつまく使つて七五七五とつづく今様風の七五調に轉換させてゐます。日本人に歌ひやすい唱歌になりやすいからでせうか。日本最初の音楽教員養成機關として、明治二十三年に東京音楽學校が開校しますが、その母體であつた「音楽取調掛」では既に唱歌教育についての方針を打出してゐました。

「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シ將來我國樂ヲ興スノ一助タルベキモノヲ造成スルヲ以テ現今ノ要務トナス…」

「三才女」の歌は、聞いてゐると誰にもすぐにわかることですが、A B Aの構成になつてをり、Aが長調、Bが轉調されて雅樂風になつてゐます。東西二洋を折衷した歌であることがよくわかる好例です。

文語の苑

メールマガジン第十号

翁とて 愛國百人一首を讀む(六)

平成二十四年三月二十一日

翁とてわびやは居らむ草も木も榮ゆる時に

出でて舞ひてむ 尾張濱主

老人だからと言ってどうして俗世間を離れて佗住ひなどしてをられようか、をられる筈がない。草や木さへも榮える御代に遇へた幸せを胸に、私は天職である舞で御仕へするのだ。

よみ人の尾張濱主は、奈良朝から平安時代にかけて長らく朝廷の舞樂を勤め、仁明天皇の承和十二年(八四五)一月八日、十日の二日に互り長壽樂を舞つて天覽に供した時百十三歳でありました。掲出の歌はこの時天皇に奉答したものと云はれてゐます。

「わびやは居らむ」の「や」は反語の係助詞で、「居らむ」はフ變動詞「居り」の未然形「居ら」に意志の助動詞「む」の連體形が係結で對應して「居られようか、いや居られない」の意となります。また、「舞ひてむ」の「てむ」は完了の助動詞「つ」の未然形「て」に意志の助動詞「む」が接續したもので、「舞納めようぞ」と強い意志を現してゐます。

百十三歳の翁の力強い歌ひぶりに大いに勇氣づけられる思ひです。實際の舞を見た人々の感動もさぞやと推し量ることができませう。高齢になつても活躍できることは、或る意味で人生究極の仕合せと言へます。それには本人の弱年時代からの精進と共に、それを可能にする國家社會の包容力が必要となります。前回の「豊の年」で橘諸兄の歌を引用しましたが、「白髪までも大君に仕へまつればたふとくもあるか」といふ、白髪の翁が大君に仕へ奉れるのは、自分の健康と、聖代の御蔭と感謝する氣持、さうして、元氣のある限り國に盡さうといふ氣持、この二つが特に奈良時代から平安初期にかけて共有されて、國の繁榮を齎したと考へられます。

さう思つて同じく愛國百人一首に選ばれてゐる

青丹よし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり 小野老

寧樂(奈良)の都が榮えてゐるのは花が咲いてその薫が馥郁として漂つてゐるやうで、今正に實感できることであるよ

を讀みますと、これが單なる表面的な讚美だけではなく、自分達の働きが太平と繁榮を齎してゐることの實感が籠つてゐて、その根柢にある生業として勤勞を尚ぶといふ我が國文化の特質に氣附きます。

今日、我が國が高齡化社會になりつゝあることに憂慮する傾向もありますが、一面では國が榮えてゐるからこそ高齡化社會が實現したとも考へられ、それならば、高齡者の元氣で國を更に榮えさすことも可能な筈で、私も若輩ながら後期高齡者の一人として能ふ限りの元氣を國に捧げたいと思ひます。

市川浩

文語の苑

メールマガジン第十号

一旦緩急あれば

教育勅語に「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」の一節がある。

これを目して、「文法的に間違つてゐる」と指摘する人が少なくない。

「まさかのことがあつたら、いざ鎌倉と駆けつける」だから、「假定条件」である。高校の古典文法では、「未然形+『ば』＝假定条件」、「已然形+『ば』＝確定条件」(～なので)といふことになつてゐる。随つて、「一旦緩急あれば」では、「まさかのことがあつたら」の意味になつてしまふ、と彼らは言ふ。「まさかのことがあつたら」の意味にしたいのならば、「一旦緩急あらば」としななければならない、との主張である。

最初にさういふ説を讀んだときは、筆者が明かに左翼系の人だったので、勅語を誹謗するのが目的だらうと見過してゐた。

しかし、決して皇室のあらさがしを意圖してゐるとは思へない人々が、意外に「一旦緩急あれば」を間違つてゐると主張するのを聞くことが少なくなひ。

考へてもいただきたい。あれだけ、推敲と校正を重ねる勅語に、そんな單純なミスが発生することがあり得るものだらうか。

「已然形+『ば』」には三つの意味がある。

- (1)「～なので」
- (2)「～すると・～してみると」「(過去)
- (3)「～の場合には」「(未来)

「トンネルを抜けると雪國だつた」を文語に譯すと、「トンネルを抜くれば雪國なりき」となる。

この「抜くれば」は、(2)であり、「抜けると・抜けてみると」の意味である。

そもそも、漢文訓讀に、「レバ則」といふものがある。

「已然形+『ば』」の後には、「則(すなはち)」が來ることが多く、上の文ならば、「トンネルを抜くれば、則ち雪國なりき」と「則ち」を補ふことができる。

もちろん、「～すると・～してみると」の意味である。「則ち」が消えても、俄かに意味が變はるわけではない。

「一旦緩急あれば」は(3)であり、「一旦緩急があつた場合には・生じた場合には」の意味である。これも、「一旦緩急あれば則ち……」といふことができる。

「一旦緩急あらば」と言ふことも可能である。その場合も、意味に大差は生じない。

それは丁度、英語のifやwhenの構文に於て、形が少し違へば、微妙な意味の差が現れるのと同斷である。

- (甲) When anything urgent breaks out, get together to fight for the country.
(ニ) If anything urgent breaks out, get together to fight for the country.
(丙) If anything urgent broke out, get together to fight for the country.
(丁) If anything urgent should break out, get together to fight for the country.
(戊) If anything urgent were to break out, I would expect you to get together to fight for the country.

いい加減な数字を使つて言ふと、緩急の生じる確率は、(甲)では50%、(ニ)では30%、(丙)では10%、(丁)では5%。それに対して、(戊)では0%であり、「たとへば緩急が生じると假定した場合は、國のために戦つてくれるものと期待する」といふ純粹な假定であるから、命令形とは結びつきにくい。

「一旦緩急あれば」が、英語の(甲)～(戊)のどれに対応するかは一概には言えないが、英語にさまざまな表現があるやうに、日本語の場合も、「あれば」と「あらば」が微妙なニュアンスの違いを表してゐることは察せられるのである。

かくして、「已然形+『ば』」=確定条件」と決まつてゐるわけでないことがお分りいただけたと思ふ。

最後に例に引きたいのが、吉田松陰の「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」である。

「かくすればかくなるもの」と考へたのは、過去のことであるから、この「すれば」が確定条件でないことは明らかである。過去に時点に於て、「このやうなことをしたら、どんなことになるかは分かり切つてゐる」と考へたのである。予測を立てたのであり、「あんなことをしたので、こんなことになつてしまつた」と言つてゐるのではない。

「已然形+『ば』」の三つの用法のうちの(3)である。

高田友

文語の苑

メールマガジン第十号

吾が昭和の豊けき青春（二）

吾人は寮にて反帝學評に屬する先輩に勧誘せられ數度國會アモに参加せるも、機動隊に蹴られ抓られ追ひ立てらるるの繰り返しに嫌氣差し飽きも来てつひには離脱せり。其の後は、矢張り寮在住の郷里の先輩の勧誘により應援部に入部す。爾來これこそ吾が本望なれと思ひ成して此の部活動に耽溺し四年次には主將を勤む。リーダー部員及び吹奏樂部員合はせ七十餘名を擁せり。今でこそ激越にして利他的なる自己犠牲の部活動の様がNHKに採録されかなり人目を引くも、當時吾等が時代の其れは寧ろ遙かに自由にして自發的なりし。ただ、神宮球場に於ける六大學野球の東大の連戦連敗に痺れを切らし酒氣帯びし擧句「氣合」を入れんと野球部合宿寮に亂入せし事あり。慮外、監督さんが直直に玄關に出て謝罪せられたるに卻りて恐縮す。當時の東京六大學、明治大學に星野投手、法政に田淵・山本・富田の三羽鳥と山中投手、早稲田に荒川・小坂投手等々綺羅星の如し。連敗も已んぬる哉。

昭和四十三年頃なるか、此等學生運動が最盛時に至るや學内は悉く學生に封鎖せられ剩へセクト間の内ゲバが日常化す。斯かる状況下、吾が應援部員の行動的傾向は學内の雰圍氣を其の儘反映し、全共闘系、日共民青系、ノンポリ系に凡そ二分する氣配を見せ甚だ氣まづき空氣となり凡そ部の統合運営を進むる能はず暫し活動を休止する已む無きに至れり。六大學野球秋のシーズンは漸くやり通せしものの、當時折角立ち上がりし吹奏樂團演奏會の中止を決定。其の後、其の復活を圖るも八年後まで果たせず。眞に苦澁の選擇なりしも中止の事其の後長く後悔せり。

昭和四十四年一月の二日間に渉る安田講堂攻防戰を経て籠城學生は全て排除され急速に學内鎮靜化に向かへり。當時四年次なりし吾人、これらの状況を奇貨として更に加へて二年學内に遊學し都合六年に及ぶ自由懶惰の生活を送れり。當時好景氣の故に有利なるアルバイトに恵まれ郷里からの仕送り殆ど不要なりし事もこの留年を可能ならしむ。最早還らざる往昔の事なれど、あの時期部活動に注入せしエネルギーを勉學に差し向くる事無かりしの憾み遣れり。

昭和四十六年四月、日清紡績に入社せり。應援部先輩の勧誘に迷はず應ぜしものにして、別個の他社と比較考量して決めしものに非ず。實に鷹揚と言はんか好い加減と言はんか、今や紡績業は構造不況業種なるに何ぞ入社せると吾を誘る者ありしも意に介さざりき。會社なればいづくも同じといふ氣分なり。

日清紡は當時、本業の綿紡中心の超堅實經營の會社にして無駄を徹底排除し出費抑制が全社に行渡る社風なり。自社を自虐的にケッチン紡と言ひ募る社員も居れり。入社式の折、櫻田武社長の講話有り。長軀瘦身にして夫子然たりしが、其眼光炯炯たる、又兩の^{ふたつ}耳朶^{みみたぶ}潰れたる容貌ぞ印象に残れる。耳朶は岡山・六高柔道部傳統の寢技の猛稽古に因るものとて得心す。

故ありて在社二年の後同社を退職せり。在社期間こそ僅かなりしも在職中の想ひ出は未だに盡きず。結婚を控へ再就職を焦る吾人に後日入社するソニーを紹介して下されしは、退職時富士工場勤務課にて仕へし課長なり。吾人は未だに懐深き會社なりと日清紡と人を敬愛す。

昭和四十八年四月、ソニーに入社せり。北品川の本社勤務部にて就労す。時たま社内巡回中の創業者井深大氏や盛田昭夫氏の社服姿を瞥見せり。今は考へ及ばぬ風景なり。當時同社賣上は電機業界にてビクターの後塵を拜する六・七位の規模なり。以來三十三年、吾人は同社にて人事・労務・總務の範疇の業務に就き、厚木テクノロジーセンター（舊厚木工場）代表の職を以て六十歳定年退職す。

在職時の痛快事は、品川驛裏に在りし芝浦工場にてウォークマン・CD・ハミリビデオ等を櫛の齒を挽くが如く次々と世界に先駆け開發・製品化し、業界を席捲し續けたる猛烈なる熱氣の中で仕事する機に遭遇せし事なり。翻りて痛恨事は、家庭用ビデオ。ベータマックス敗退に依る幸田工場の大リストラ、同和問題に端を發する糾弾學習會、インドネシアのオーディオ工場に於る大ストライキ等なり。

大東亞戰爭敗戦直後に生を享け、復興期の貧しくも希望滿ち光輝ける時代に一生懸命なる先生方より教育を受け、經濟成長興隆日本の企業にて力一杯働き得たり。然り、昭和の日々は斯くも豊けき時代なりき。友と會へば言ふ、「あの頃は佳き時代なりし」と。然るに吾人は今、何故か惑ふ、何事か思ひ悩む。長き六十年の間に、吾人にとり掛替へ無き大事の何物を置き忘れたるらむと。

以上

* 自己紹介を論題とし「文語文」を初めて試む。市川浩先輩の添削あるを記し、謝意を表す。

内藤賦一